

群馬の田舎教師

川野辺 一江

明治七年に焼失した上州（群馬県）館林城は平城で四方を城沼で囲まれていた。

沼の畔に城を築造する時、建立された尾曳稲荷神社がある。境内に田山花袋の歌が丸みのある石板に刻まれて建っていた。

『田とすかれ畑とうたれてよしきりもすまずなりたる沼ぞかなしき』

「田山花袋って館林の人？」

女学生の私は母に聞いた。母は頷いて

「そうだよ。館林城の最後の藩主として山形から来た秋元様の藩士の息子で、明治になって東京に出て大変苦勞をして小説家になった人らしいよ」

そばにいた父が

「田山花袋の小説に『田舎教師』というのがあるが明治時代、羽生町の近くの村の弥勒という高等尋常小学校の教師をしていた人がモデルの小説だ。お父さんも利根川のこっちの田舎の高等尋常小学校で若い時、教師

をしていたから、群馬の田舎教師だったのさ」

と話してくれた。

父、若江（旧姓木村）清次郎は明治三十四年十一月、利根川の土手の近く群馬県邑楽郡千江田村江口で米穀商と農業をしていた木村助次郎、むめ夫妻の五男として生まれた。

田山花袋の「田舎教師」の主人公の林清三は明治三十四年四月、十八歳で埼玉県三田ヶ谷村弥勒高等尋常小学校の教師になった。

地図で見ると父の生まれた江口と弥勒は利根川を挟んで一里ほどの距離だ。

明治四十年、羽生駅から利根川に鉄橋がかかり父の村の川俣駅、館林駅、足利駅と東武鉄道が線路を延ばした。

父と友達が尋常小学校を怠けて東武鉄道の線路工事を眺めていたことがあった。荒っぽい工事人夫が喧嘩を始めて五寸釘を一人の人夫の背中に打ち込んだのを見て、父達は度肝を抜かれるほど驚いて家に帰った。

家の中に入ると頑固一徹の祖父の助次郎がものも言わず、父に拳骨をくれたという。近所の人が学校をサボって線路工事を見ていた父のことを祖父に言いつけたらしい。

明治四十三年のこと、台風で大雨が降り利根川の群馬側の土手が決壊した。

父の住む江口周辺は水没した。村の人々は土手に避難して救援の食糧を食べて水が引くまで土手の上で生活をしていった。

父の通う小学校は幸い高台にあったので水没しなかった。父と友達は川を流れてくる流木を集めて筏を作り乗り回していた。

ある日、父と友達が筏で寺の門前を通ると住職が立派な袈裟を着て、お供を連れて出て来て、土手まで筏に乘せてくれと言う。

父は無理だと断ったが住職は急いでいるからと無理矢理、乗り込んできた。

筏はアツと言う間に転覆してしまい、住職もお供も袈裟も泥水まみれになってしまい気の毒だったと父は笑いながら話してくれた。

父は利根川で泳ぎをおぼえ、遊び仲間と近在の林や原っぱを駆け回って遊んでいた。ある時、鶺鴒（ばん）の卵を巣から取り、家の物置の鶏の巣箱に入れて孵化させるつもりだった。ところが、お祖父さんに卵を見つけられ捨てられてしまった。

清次郎はそんなことがあってもがっかりしないでまた次の悪戯を考える、いつも元氣一杯の腕白坊主だった。父は高等小学校を出たら、陸軍幼年学校に入って軍人になるつもりだった。

しかし師範学校を出て父の通う小学校の校長をしていた三田先生がお祖父さんに

「清次郎君は元氣で運動するのが得意だから、師範学校に入れて学校の先生にする方が良いですよ。軍人は戦争に行つて命を落としたら終わりです」と説得したとのこと。

普段は厳しいお祖父さんも末子の父のことが可愛かったらしい。お祖父さんの方針で父は師範学校に進むことになった。

今まで何時間も机に向かって勉強をする習慣の無かった父が三田先生の指導を受けて師範学校受験のための勉強に専念した。

体重が数貫目減るほど勉強した甲斐があつて群馬県師範学校の入学試験に合格した。

信仰心の厚いお祖父さんは方々の神社に合格祈願をしていたので合格がわかるとすぐ、父を連れて隣村の天神様から、栃木県佐野町の願山大師までお礼参りに歩いて出かけた。

父がすでに開通していた東武鉄道の汽車に乗って行きたいとお祖父さんに頼むと

「神様にお礼参りする時に楽をしようとはとんでもない。歩いて行くのだ。」と怒られて、往復、歩かされた。

受験勉強で体力の衰えていた父はこの時ほど疲労困憊したことは無かった。足が出なくなっただうようにして家に戻ったそうだ。

父はその後、体力的に苦しいことがあっても、あの神社へのお礼参りの時の苦しさに比べれば、まだマシだと思っただと私に話してくれた。

父は師範学校に入学してから水泳、器械体操、陸上競技等に熱中した。

群馬県マラソン大会に出場して前橋市内の国道を先頭で走っていた時、報道の新聞社の自動車に轢かれてしまった。

大正時代のこと、父の実家のある利根川べりの村で電話のあるのは村役場と江口の造り酒屋だけだった。その造り酒屋の主人が父の実家に師範学校に行っている息子さんが自動車に轢かれたらしいと知らせしてくれた。

そこで、むめ祖母さんが群馬の端から群馬の真ん中に位置する前橋市まで何時間もかかって駆けつけた。

父は車に轢かれたが骨折はしなかった。父の左足太ももに傷跡があった。

花袋の「田舎教師」では主人公の清三と熊谷中学校の同級生だった友人とのつき合いや手紙の遣り取りがよく出ている、清次郎は師範学校時代の同級生とどのようにつき合っていたのだろうかとは興味があった。

私が入った大学の教養課程の教授に黒澤という教授がいた。その人は父の師範学校の同級生で後に東京高等師範学校で学び国立大学の教授をしていて退官した人だった。

私は父の師範学校の時の様子が知りたくて黒澤教授の部屋を訪ねた。

「ああ、木村君の娘さんですか！木村君は元気で陽気で、スポーツ万能だったなあ。そう言えば彼は大食で外食する時はかつ丼も天丼も二、三人前は食べたものです。今でも大食ですか」

と懐かしそうに話してくれた。

父は花袋の「田舎教師」の清三のような文学的な才能はなかったようだが、清三が甘いもの好きだったところは似ている。

わが家で暮れに餅つきをして餡こる餅を作ると父は一度に八個以上は食べた。おはぎも大福餅も好きだった。

父は若い時の大食がたたったのか胃弱で、漢方薬の千振を亡くなるまで飲んでいた。

父は大正十年師範学校を卒業すると生まれ故郷の江口の東隣の大箇野村（オオガノムラ）の高等尋常小学校に訓導として赴任した。

大箇野村は鶴の形をした群馬県の嘴の部分に位置していて南に利根川が流れる田園地帯で村民の殆どが農業だった。

父は自転車に乗って江口の実家から一里ほど離れた大箇野村の学校へ通った。道は平坦だった。関東平野の西側に秩父連山、その左に富士山がくっきりと見えることもあった。北側に裾の長い赤城山、右に男体山、広い田圃の遥か東側に筑波山が見えた。

四月の畑は明治六年から栽培を始めた地元特産の梨の花が真っ白に咲き、六月になると梨の棚の下で摘果作業をする人が村の道を自転車で走る清次郎を見送るのだった。

大箇野高等尋常小学校の五年生、六十名の生徒の担任になった清次郎先生は元気一杯だったので早速、生徒達から「張りきり先生」と呼ばれるようになった。

新学期に五年生になった男子は全員登校したが、登校しない女子が何人もいた。

放課後、担任である清次郎先生は不登校の女生徒の家を訪問して事情を聞いた。
ある親は

「家は子どもが多くて下に弟や妹がいるので娘は四年生で学校を下がらせてお守りをさせたいと思います。」
と言います。

「息子はしっかり高等科までお世話になります、女の子は嫁に出すので家事を仕込むために四年で止めさせたいと思います。」



と言う親ばかりだった。

受け持ちの清次郎先生はその親たちに

「尋常小学校六年生までは義務教育なので娘さんを学校に通わせてください。」
とひたすらお願いするばかりだった。

花袋の「田舎教師」には小学校を四年でやめる女子のことは出ていないので、調べると明治十九年、尋常小学校が義務教育として設置され。明治三十九年まで満六歳で入学、修業年限は四年だった。

明治四十年から修業年限が六年になったことがわかった。

清三が弥勒の学校で教師をしていたのは明治三十四年から三十七年の間だったので義務教育はまだ、四年生までだったのだ。

昔の関東平野は寒かった。十二月になると大箇野小学校の校庭に雪が積もった。

「男子はこれから暖かくなる運動をするから裸になって校庭に出ろ！」

清次郎先生も裸になって雪の積もった校庭を走りだした。男子生徒もその後から雪の上を裸で走り出した。校庭を一周したところで先生は

「どうだ、皆、暖かくなったか？」

と聞いた。

「暖かくならない。寒いです！」

生徒達が答えると

「それじゃ、もう一周走れ！」

と先生が叫んだ。先生の走る後を男子生徒がまた一周した。三周ほどした後、

「先生、足は冷たいけど体は熱くなりました！」

と言う生徒の声で皆、校庭から教室に入ることが出来た。

当時はこんな荒っぽい授業をしても父兄から何の苦情も学校に出て来なかったらしい。

後年、同級会で清次郎先生に会った教え子が

「先生、あの雪の校庭を走った時の冷たさを思い出して辛いことに耐えることが出来ました。先生に感謝しています。」

「俺もだ！俺もだ！」

と口々に清次郎先生に告げた。

父は昭和二年七月に文部省中等教員体操科検定試験に合格した。

そこで大箇野高等尋常小学校を辞して前橋の群馬県女子師範学校の講師になった。

その頃、清次郎の父、助次郎が脳溢血で倒れ自宅で療養を始めた。清次郎は土曜日の授業が終わると、江口の実家まで帰り日曜日の昼過ぎまで病みついている父親の肩を揉み身体をさすってやることを父親が亡くなるまでの二年間続けた。

花袋の「田舎教師」の清三は店の主人だった父親が人に騙されて零落してしまい、田舎の豪家に贖物を商う姿を見て不甲斐なく思う。そして、貧しい家計を補うために仕立ての賃仕事に根をつめる母のやさしい言葉に胸を痛めるのだった。

清次郎にとって祖父の存在が大き過ぎて祖母の姿は霞んでしまったようだ。

その後、父は日本の統治下にあった朝鮮の江原道（現在は軍事境界線・北緯三八度線を挟んで北側は朝鮮民主主義人民共和国と南側に大韓民国に分断されている）の公立師範学校に出自を命じられて赴任した。

朝鮮に行く前日、清次郎は師範学校の先輩の自宅に行った。すると、外がざわつき

「大変だ！その踏切で人が電車に轢かれた。」

それを聞いた清次郎は

「それは大変だ。見に行ってくる！」



と叫んで先輩の家から飛び出して行った。

先輩は苦笑しながら奥様と遊びに来ていた女学生のいる部屋に入って来て

「今、飛び出して行った木村君は師範学校時代から好奇心が旺盛で評判だった。彼は、朝鮮の師範学校で教えるために明日、出かけることになっているのだが」

と二人に話した。

この女学生・若江喜美と木村清次郎は数年後、見合いをして結婚することになるのだ。

木村君の声だけ聞いていた喜美は

「学校の先生でも人身事故を見に行こうとする物好きな人がいるのだなあ！」

と呆れて木村君のことを記憶した。

清次郎は朝鮮の公立師範学校で一年間、教鞭をとり日本に戻ってきた。

清次郎は江原道の冬は零下になるので寒いこと、海のように広い鴨緑江でスケートが思う存分に出来たこと。住まいはオンドルの床暖房なので日本の家より暖かったこと。食べ物に大蒜（にんにく）が使われるので口に合わなかったことなどを私に話してくれた。

朝鮮から門司港に戻ってきた清次郎は駅で群馬までの切符を買って列車を待つ間、駅前広場で見世物をやっているのを覗いていた。

「混みますのでどなた様も懐中には十分ご注意ください」

見世物をやっている香具師が見物客に声をかけた。清次郎は懐の財布を確認した。すると後ろから人々がぐいぐい押してきて清次郎は転がりそうになった。ハッと気がついて懐に手を入れると財布が無くなっていた。どうやらつけられていたらしい。見世物と掏摸は仲間では押された時に清次郎は一年間、朝鮮の学校で働いて貯めた俸給を全部盗まれてしまった。故郷までの列車の切符は被っていた帽子に挟んでいたので助かった。

門司から、一昼夜かけて、飲まず食わず列車に乗り、江口の実家にたどり着いた。

日本に戻ってきた清次郎は県立桐生高等女学校の体操科の教諭に赴任した。

女学校の校庭で全生徒を集めた体操では、清次郎先生が人一倍大きな声で号令をかけるのでその声が学校周
辺まで鳴り響いた。

「田舎教師」の主人公の清三は弥勤の学校に勤めて二年目、親しくしていた友人達が上級学校に進学してい
るなか、自分の境遇だけが恵まれていないという孤独感に襲われた。

『彼は噂話で聞いていた茨城県の中田の遊郭に出かけた』と記されているが田山花袋の創作の箇所モデル
になった秀三の日記にはそれらしきことは記録されていない。

清次郎は厳格な父親が亡くなった後、夜の賑やかな桐生の町で同僚たちと酒を飲み遊ぶことをおぼえた。

これを心配した三田先生が清次郎に見合いを勧めた。相手は館林町の南、六郷村近藤生まれの若江喜美と言
う清次郎より七歳年下の女性だった。清次郎は知らなかったが喜美は朝鮮に行く前日、清次郎の先輩の家で声
だけ聞いた、あの木村君だと覚えていた。

昭和五年木村清次郎は若江喜美と婿養子縁組をして若江清次郎になった。

江口の大百姓の五男坊として遅しく育った父と地主をしていて田舎に住んでいても畑仕事をしたことのない
両親と姉二人の家族の中で育った母、喜美の新婚生活は戸惑うことが多かったと母から聞いた。昭和六年に長
男、八年に次男が生まれ、長女の私は昭和十九年十二月に生まれた。

「お父さんは桐生の町の一番大きな人形店に一揃いしかなかった雛人形の五段飾りを、『十一年ぶりに生ま
れた一人娘の初節句なので売ってもらいたい』と日参した。店主は店の飾り用に残したかったがお父さんに根
負けして、雛人形を売ってくれたそうだよ」

と次兄が父の亡くなった後、飾ってある私の雛人形を眺めながら話してくれた。

戦後、わが家は桐生から母の故郷、六郷村近藤に転居した。父は六郷村から町村合併した館林市の三つの中
学校の校長を歴任して定年を迎えた。父は就任した中学校の陸上競技部の指導に力を入れた。



そして、市内中学校対抗試合では優勝したので生徒達と父兄に喜ばれた。

一九六四年十月東京オリンピックが開催された時、日本全国を聖火リレーが行われた。

六十三歳の父が館林の国道を走るランナーに選ばれて日の丸の鉢巻きをして走った。

一人娘の私が結婚して長野県の阿智村で、生活を始めると六十九歳の父は母を連れて、習い始めたばかりの軽自動車で館林の自宅から阿智村にやってきた。途中の和田峠で燃料が殆ど無くなりガスを起こしそうになって母をハラハラさせたとのこと。

夫の転勤で私達一家が金沢市に移ると、今度は七十一歳になった父が一人で、朝七時に館林の自宅を軽自動車を出発して途中、一泊する予定だったのを止めて四百三十キロメートルの距離を十四時間かけて金沢のわが家に到着して、心配していた私と夫を驚かした。

父の生涯は腕白坊主のままだった。

テレビの相撲観戦が好きで横綱の栃錦と若乃花を鼻肩にしていた。プロ野球の実況放送を車に乗る時も畑に出る時も聞いていて、読売巨人軍を応援していたが、成績の悪い年は

「今年の巨人はまったくだらしがない！」

と私の前でも嘆いた。

競馬の好きな友人に誘われてダービー、天皇賞、皐月賞、有馬記念など重賞レースがあると上京して観戦するようになった。

「競馬場の広々としたコースを馬達が走るのを見るのは気持ちが良いもんだ」

と府中競馬場から帰ると私に話した。

競馬を楽しむ父を見ると

「勝負ごとに熱中するなんて」

と母はこぼしていた。

大箇野高等尋常小学校で教えた教え子達が還暦を過ぎた頃から、七十代の父を毎年旅行に招待してくれたので父は喜んでいた。

退職後、父は畑を耕し、種蒔きをして収穫期になると実った茄子、胡瓜、西瓜、里芋、さつま芋等を友人や教え子に届けていた。

父は亡くなる三年前、肺癌の手術をした。それまで病気をしたこと無かった父は、手術後二日目、これまで通り頭から水をかぶって洗顔したり、安静を守らず婦長さんから病院開業以来の我儘な患者だと叱られた。

父は母に内緒で入院中もダービーの投票券を東京在住の次兄に頼んでいた。

癌を手術した後、一ヶ月後には畑に出て、家族を心配させる父だった。

父、清次郎は昭和五十七年六月に八十歳で亡くなった。

父の葬儀の時、顔見知りの焼香客の中に、一度も家に来たことのない、隣の地区の煙草と精米業を営む店の未亡人が並んでいて

「清次郎先生には旅行のお土産や野菜をいつも沢山届けて頂いたり、これまで長い間、色々と大変、お世話になっていました」

と私に声をかけてきた。

私は元氣過ぎた父の

「これが最後のメッセージだろうか？」

と父の遺影を見つめながら思った。

○参考資料1

「田山花袋『田舎教師』のモデル日記原文と解釈」

小林一郎著

創研社刊



○参考資料 2

「田舎教師」

田山花袋著

新潮社刊

○参考資料 3

「ついでとの記」

若江きみ